

# タイトル：大豆の集団転作を契機に集落営農組織へ

## ～ 大淀営農生産組合の歩み ～

氏名(法人名)：大淀営農生産組合

### 1 組織の概要

大淀営農生産組合の前身である大淀転作組合は、昭和54年より村山市では最初の集団転作として団地化を図り大豆転作に取り組んできた。団地化を形成する上では、集落内での合意に基づき交換分合など利用調整を図り排水の良いほ場に団地化するなど、村山市における大豆栽培のモデル地区になっている。大豆の安定的な多収穫・高品質生産を実現し大豆採種ほの設置につながった。また、水田畑地化モデル展示ほ(平成13～17年、県内4か所の一つ)を設置するなどして畑作物の収量・品質の向上に取り組み、水稻と大豆による安定した経営を図っている。



当組織は、平成19年3月19日に平成19年度からの品目横断的経営安定対策に対応するために、集落ぐるみ型の水稻と大豆による集落営農組織に発展した。北村山地域で最初に設立されたものであり、集落農業の担い手として効率的な営農活動、若手農業者の育成、環境に配慮した農業などに取り組んでいる。

### 2 活動内容

#### (1) 効率的な営農活動の実施

栽培面では、各品目毎に栽培計画や作業計画を作成し、作業毎に適正な作業人員を配置し栽培管理に当たる体制を整えている。

経営面では、生産資材の購入に当たっては経費削減のために必要な生産資材、購入量を組織内で調整し共同購入している。機械の有効利用についてもこれまで実施してきた共同購入・共同利用を維持・発展させ、集落の経営規模に応じた効率的な機械装備を目指している。

#### (2) 高齢化・担い手不足に対応した集落営農の推進

近年、集落内農業者の約半数が65歳以上となり、高齢化と担い手の減少が深刻化していた。そこで、平成7年に集落内の中心的な農業者が認定農業者となり、担い手がない農家の農地や農作業を引き受け、農地の集積や作業受委託を推進してきた。

また、若い農業者を集落営農の担い手として捉え、若い農業者に機械作業等を集約して作業委託するなど、若手農業者を集落営農のリーダーとして育成しており、集落の農業を守る取り組みを行っている。

#### (3) 環境に配慮した農業の実践

大豆は連作障害が発生しやすい作物である。そこで、土づくりによる連作障害回避のために積極的に堆肥の投入(1～2t/10a)を行っている。

大豆の施肥については基肥一発肥料(追肥成分：緩効性肥料)を使用しており、追肥の手間を省きながら環境に配慮した施肥体系を実践している。

生育状況について組織構成員全員ではほ場を巡回調査し、病害虫の発生時には、状況を確認した上で適切な農薬を選定・共同購入し、地域一斉防除により防除効果が高まる工夫を実践している。

### 3 今後の発展方向

これまで地域で培ってきた集落内での話し合いを尊重し、当組織では今後も構成員の合意形成を図りながら営農計画を策定し、経理の一元化などを含む特定農業団体(農業法人)への発展にも取り組んで行くこととしている。その実現に向けて、機械の共同購入・共同利用や共同乾燥調製施設等の利用を推進し、経費の節減による構成員の所得向上に取り組んでいくことが重要といえる。こうした取り組みを進めることで、構成員の高齢化や農家減少にも対応した地域農業の担い手として当組織が集落の農業を維持・発展していくことが期待できる。